

観世

令和五年 九・十月号

題字・二十五世観世左近 表紙デザイン・阿部壽

目次

- 観世会定期能(九月) 10
京都観世会例会(九月) 11
観世会秋の別会(十月) 12
荒磯GINZA能(十月) 13
京都観世能(十月) 14

巻頭随筆・No Noh, No Life —— 山口桂 16

連載・謹訳 能の本(九十四) 阿古屋松(上) —— 林望 18

観世宗家の舞台から、生命漲る「道成寺」

観世三郎太師の初演を祝して —— 宮本圭造 24

日本能楽会新会員 —— 26

【特集曲】姨捨 月と老女 —— 渡辺保 28

連載・能に描かれる愛のかたち(九)

狂う愛 —— 松村栄子 36

窓 —— 43

催し案内 —— 47

九月・十月の番組 —— 48

観世グラフの記録 —— 75

編集後記 —— 76

観世グラフ 2 ~ 9

月と老女

● 渡辺 保

信州更科さらしなの里は月の名所である。なぜここが月の名所なのか。おそらくそれは、更科の里の地形によるだろう。謡の本文にもこういう。

嶺平らかにして万里の空も隔てなく、千里に隈なき月の夜

(あるいはまた)

月の名の、ことに照りそう天の原、隈なき四方の景色かな

実際に更科へ行って見れば分かるが、この短い描写はよく更科の里の風景を描いている。

四方の「嶺」は同じ高さで平らに並んでいて、まるで四方に屏風を立て回したように盆地を囲んでいる。その月のクレーターの様な盆地に月が昇ると、

その光は、「隈なき四方」に行き渡って、さながら「天の原」——大空かつ天国のような独特の別天地の景色になる。

能の「姨捨」は、この更科の里の独特の地形を照らす月の光をテーマとしている。むろんドラマの内容容は、「古今集」の和歌

わが心慰めかねつ更科や

姨捨山に照る月を見て

読み人知らず

を発想の原点として、「大和物語」はじめ多くの伝説や仏教の月に関する経文を題材としている。しかしそれらの題材をもととして能の戯曲が一つ形を成したのには、この地形が果たした役割が大きい。

イプセンの名作「幽霊」が、あのノルウエーのフィ